

「徒然草の授業」

―読みの軸を自ら設定し、批評的に読む―

金子 直樹

『徒然草』は中高の教科書にも必ず取り上げられる作品であるが、「無常観」という便利なキーワードで括られることによって、かえってその思想が学習者の頭上を素通りしてゆく懸念もある。『徒然草』の多くの章段を重ね読み、比べ読みしてゆく中で、そこに「ある関連」を意識するという、学習者の思考自体をも明らかにするということを通して、テキストと読者との関係を具体的なものにしてゆきたい。

1. はじめに

古典の授業においては、学習者の現実感が大切である。文化や時代背景が異なる古典では、表された思想や人物の心情が学習者の現実と結びつかず、テキストの中だけの閉じたものとなりかねない。定番教材である『徒然草』も、現実社会を生きつつある中学・高校生には実はなかなか縁遠い「無常観」というキーワードで、一見きれいに切り分けることができるだけに、その思想を主体化することもないまま形式的に処理してしまうことになりかねない。

これは中・高等学校の古典教育だけの問題ではない。教育実習で『徒然草』を扱うにあたり、単元構成・教材配列について実習生と話し合う機会にも、同様の問題を感じた。もちろん大学生は大学での講義や自身の教材研究によって、深い内容理解まで到達しているのであろうが、例えば「あなたは、どのような目当てをもって、『徒然草』のどの章段を扱うのか？」という問題設定に対しては、極めて臆病な回答が返ってくる。感覚的な言い方をすれば、自分で『徒然草』をおもしろいと思って読んでいない、という印象である。

『徒然草』は様々な内容・表現による多くの章段からなるが、それらを重ね読み・比べ読みをする中で、ある「関連性」が意識されるとすれば、その「関連性」とは、どこに「関連」を見出すのかという読者自身の思考の傾向の表れであろう。それを意識化することによって、テキストと読者（学習者）との結びつきを、主体的なものにしてゆきたい。それは、テキストの／テキストとの比較を通して自分自身を明らかにするという、批評の試みでもありと考える。

以下の報告は、2011年度4年生2学期の授業の記録である。

2. 『徒然草』単元構成と授業展開

大きく三つの区分の単元構成・教材配列とした。

① a 失敗系章段と b 達人系章段

章段間の関連を意識しながら読むという、読みのト

レーニング。中学教科書収録の章段からの発展を中心に、9月10月の教育実習で実施した。（*は問題演習のみでの扱い。以下同様）

- a ・52段 仁和寺にある法師、年寄るまで
- ・53段 これも仁和寺の法師
- ・54段 御室にいみじき児のありけるを
- ・236段 丹波に出雲といふ所あり
- b ・91段 ある人、弓射ることを習ふに
- ・109段 高名の木登りといひし男
- ・231段 園の別当入道は、さうなき包丁者なり
- ・150段 能をつかむとする人
- ・185段 城陸奥守泰盛は、双無き馬乗りなりけり
- ・186段 吉田と申す馬乗りの申しはべりしは
- ・187段 万の道の人、たとひ不堪なりといへども
- ・51段 龜山殿の御池に大井川の水を
- ・114段 今出川大臣殿、嵯峨へおはしけるに
- ・151段 ある人言はく、年五十になるまで*
- ・167段 一道に携はる人*
- ・168段 年老いたる人も一事すぐれたる才*

生徒学習記録から

…私は、園別当入道と北山太政入道のどちらの言い分にも納得できるところがありました。しかしここで兼好は、「趣向を凝らしておもしろがるよりも、自然である方がよい」と言っています。園別当入道は料理の達人であるけれども、これは、今まで学習してきた失敗系章段との結びつきがあるのではないかと思いました…

②兼好の思想・「無常観」の具体的把握

「兼好はなぜ達人の話が好きなのか？」という問いかけを導入とし、「無常」というキーワードは137段「花は盛りに」末尾の「閑かなる山の奥、無常の敵、競ひ来たらざらむや」で初めて扱う。兼好の言う「無常」とはどのような形で表れるのかを、具体的に則して考える。

- ・137段 花は盛りに
- ・59段 大事を思ひ立たむ人は

- ・155段 世に従はむ人は
- ・7段 あだし野の露消ゆる時なく*
- ・74段 蟻のごとくに集まりて*
- ・188段 ある者、子を法師になして*
- ・217段 ある大福長者の言はく*

生徒学習記録から

…物事に初めと終わりがあるのは祭りだけでなく、人生にも当てはまるのだと思いました。行列が来る時だけ騒いで、それまでは裏に引っ込んでいる田舎者のたとえはおもしろいと思ったけれども、現代人はみんなこんな感じだと思います。初め終わりをゆっくり堪能するゆとりがありません、と言いつつしている時点で既に田舎者＝失敗なのかもしれません。でも、私たちが兼好の考えを捉えているつもりでも、実は少しずれているのは、そのせいかもしれないと思いました…

③自分の読みの軸を見つけ出す

章段間の類似や差異を具体的に把握し、その関連性を意識して自分の言葉でまとめる。内容やテーマ毎に、aからeまでのいくつかのまとまりで授業を進めてゆくと、その枠を超えて既習の各章段とのつながりも確認する。

a 無常のあらわれ方

- ・82段 薄物の表紙はとく損ずるがわびしき
- ・83段 竹林院の入道左大臣殿、太政大臣に
- ・6段 我が身のやむごとくならむにも*
- ・142段 心なしと見ゆる者も、よき一言は*

生徒学習記録から

…兼好は、あれだけ専門家や達人にこだわっているが、今回の章段では、全て完璧であってはだめだということでした。達人は物事を中心部だけでなく始めから終わりまでを知り尽くしているからよい、と言っていたのに、登り詰めると後は下るしかないから完全完璧はよくない、というのです。兼好は、時々変なことを言うので嫌いですが…

b 怪異

- ・91段 赤舌日といふこと
- ・206段 徳大寺の故大臣殿、檢非違使別当の時
- ・207段 亀山殿建てられむとて
- ・50段 応長の頃、伊勢国より
- ・68段 筑紫に、某の押領使などいふやうなる者
- ・73段 世に語り伝ふること*

c 精神の有り様と生活の具体

- ・39段 ある人、法然上人に
- ・58段 道心あらば住む所にしもよらじ。
- ・157段 筆を取れば物書かれ

生徒学習記録から

…法然上人が「起きている時に唱えなさい」と答えるのは、一見何でもありのゆるい教えのようだが、法然の意図は別の所にある。58段 157段のように、精神は具体的なものに左右される。つまり、眠気にさいなまれたままでは信心も深まらないので、修行をするにはふさわしい時機があるということだ。(授業でも眠気にさいなまれていては頭に入らないので、いっそのこと寝てしまうのがよい、とはいかないが…) 58段で「道心あらば住む所にしもよらじ」という人を、「さらに後の世知らぬ人なり」と批判している。出家しても信心だけで生きていけるわけではなく、衣食住の要素は必要だ。それでも世俗の人間よりは欲が少ないので、「然ばかりならばなじかは捨てし」と嘆いてはいけなさと論じている。このあたりの理想と現実のバランスが、一見矛盾しているように感じってしまう、兼好の思考の柔軟さなのだろう…

d 世俗への関心

- ・88段 ある者、道風が書ける和漢朗詠集とて
- ・89段 奥山に猫またといふものありて
- ・125段 人に後れて四十九日の仏事に
- ・209段 人の田を論ずる者

生徒学習記録から

…むちゃくちゃな人がいます。この『和漢朗詠集』の持ち主は、年号から考えておかしいことが分かっています。けれど偽物だとは思わず、だからこそ貴重だとするところがおもしろかったです。よく言えば前向きで、悪く言えば現実が見えていません。この人には誰も敵わないだろうと思いました。滑稽な話で、兼好は「自分に都合よく解釈するのはだめだ」と言いたいのかもかもしれません。でも、兼好はこういっただめな人たちをただ批判しているわけではないと思います。むしろ、どこか楽しんでいる感じがしました。これが、最近出てきた兼好の自由さにもつながるのでしょうか…

e 思考の変化と深まり

- ・10段 家居のつきづきしく、あらまほしきこそ
- ・11段 神無月のころ、栗栖野といふ所を過ぎて
- ・177段 鎌倉中書王にて御鞠ありけるに

生徒学習記録から

…この10段11段では、筆者の「書いているうちに考えが深まり変化してゆく」という共通項が読み取れるようです。『徒然草』には、思想としての「無常観」や、現実の人間の姿としての「いたづらな信心」や「むちゃくちゃな理屈」という内容の軸、また、今回のように筆者の書き方といった方法の軸などもあるようです。私個人としては「ち

やんとまとめてから書けよ」とも思いますが、人の世というものが無常であるように、兼好自身の思想や生活にも初めがあって終わりがあるという変化が表れていると思うと、二重底のからくりをのぞいているような、だまし絵を見ているような、不思議な感じがします…

3. 『徒然草を読む軸を探す』レポート

学習のまとめとして、自分が『徒然草』を読む軸を明らかにするというレポート（800字程度）を課した。

多くの章段を読み重ねてきた中で、

- ・自分が『徒然草』を読む際に、一番落ち着く読み方。
 - ・『徒然草』章段間の軸についての、自分なりの意見。
 - ・『徒然草』を読む中で気付いた、自分の読みの傾向。
- などについての記述である。以下にその例を紹介する。（タイトルがあるものは生徒、下線付記は引用者によるものである）

生徒レポート1「兼好の教えと私の日常」（B組女NC）

古典を読むとき、ついうっかり作品に書かれていることだけを内容として読みがちである。しかし、兼好の記した『徒然草』には現代の私たちにも当てはまるような、彼の考え方が書かれている。当時の人々の思想や生活を今を生きる私たちのそれに重ね合わせながら読み進めてゆくことが、私なりの『徒然草』の読み方かなと思う。

例えば59段「大事を思ひ立たむ人」と92段「ある人弓射ることを習ふに」と49段「老い來たりて初めて」では、まさに私自身の行動が指摘されているように思えた。59段と49段は仏道修行についての記述だが、日々の生活にもズバリ当てはまっていると思う。私にとって59段は「何かやろうと思うなら、ウジウジ考えないで思い切って行動しなさい」、92段は「思い立った時にすぐ行動するのは難しい。しかし、行動しなければ何も変わらないのだから、やるしかないよ」と言われている気がした。49段は、しょうもないことはよくするのに、大切なことには目をそらしてなかなか向き合おうとしない私に喝を入れていると感じた。「もっと早くからやっておけばよかったのに…」とよく後悔する私のような人物が非難されており、似すぎていて驚いた。「後から後悔しても意味はない。後悔しない選択をしなさい」と兼好から言われているようだ。

生徒レポート2「兼好の行き過ぎ嫌い」（D組女HR）

「行き過ぎ嫌い」。これが私の『徒然草』を読む軸です。（中略）私自身、結構行き過ぎな考えを持ってしまふタイプだと思います。不安なことがあるとトコトン最

悪なところまで考え込んでしまったり、逆にいいことがあるとその先ももっといいことがあるのではないかと調子に乗ってしまったり。行動も0か100かの極端なことが多いです。兼好に批判されるタイプです。当然、そういう自分の性格が引き起こす失敗も多く経験したわけで、何回嫌気がさしたことか知れません。だからこそ、兼好の言うことが「行き過ぎは愚かだ」と主張しているように強く感じてしまうのだと思います。

行き過ぎになっている時は、その気持ちの中に自分自身が入り込んでしまっているような不思議な感じがします。大好きなことをして自分の世界に入る感じにととてもよく似ている感覚だと思います。

ところが兼好の『徒然草』の書き方は、ある出来事をいつも傍観している感じです。私は、文章を読む時には筆者にのめり込んで読む傾向があるので（これも行き過ぎですが）、『徒然草』を読む時には当然傍観モードになりますが、その感覚が気に入りました。自分を取り巻く世界から脱出して、それを外から眺めて「自分って、アホじゃん」とあざ笑う。そんな冷静な自分になれる気がしました。

半数近くの生徒が、レポート1、2のように、自身の生活や現代の社会に引きつけて『徒然草』を読み解こうとしていた。古典のテキストを現代社会にただ当てはめてみましたというだけでなく、そのように考える自身の姿を明らかにしてゆく姿勢が表れたものが多かったことが収穫であった。

生徒レポート3（B組女MK）

『徒然草』の中で、兼好の考え方が比較的分かりやすいと思ったものは、怪異についてのところですが、でも、読む時の軸がずれている感じもあるので、少し微妙でもあります。

91段の赤舌日の話では「吉凶は日時ではなくその人の行いで決まる」、206段の牛が勝手に入り込んだ話では「脚があるのだから、牛だってどこにでも行くことができる」、207段の蛇の巣の話では「国王が治めている国の虫が、皇居を建てるのに祟りなど起こさない」というように、非常に現実的であり、また論理的な考え方のものが多いので、「そういう類の怪異迷信を信じない」という軸が通っているのかと思えば、68段で「大根を信用していた人を大根戦士が助ける」という非常に非現実的なものが入っています。これでは「迷信など信じない」という軸とだいぶずれてしまいます。

吉田兼好という人は非常に自由な発想をする人物であるので、たまにはそういうものを受け入れてしまうのだろうと思って納得してもいいのかもしれませんが、しかし、

何となくすっきりしないので、もう少し考えてみました。

基本的に 91 段、206 段、207 段に出てくるものは、あまり良いことが起こるようなものではありません。反対に、68 段では良いことが起きています。だから、「兼好は、良いことが起こるような類のことでは非現実的なものでも信じるが、悪いことが起こるような場合には、一切信じずに現実的論理的に考える」ということでしょうか。こう考えると、兼好の「現実」に対する積極的な意識が明らかになって、わりとまとまるように思いました。

生徒レポート4 (B組女MK)

赤舌日、大根戦士、猫またなどの怪異に関するキーワードが『徒然草』にはたくさん出てくる。兼好はこれらの怪異に関する物事を、時には「馬鹿馬鹿しい」と相手にせず、時には「このようなこともある」と感心している。

91 段の赤舌日の話では、誰かが言い始めた根も葉もない事だとして、吉凶は日にちなどではなく人がどう行うかによると考えている。また、89 段の猫またでは、噂を聞いた法師が信じ込んでしまい、自分の飼犬を猫まただと思い込んで川に落ちたと記述し、猫またなどの化け物の話は馬鹿馬鹿しいと述べているようである。

しかし 50 段の鬼の話では、伊勢国からやってきた鬼がいるということを兼好も気にして使いの者を出したり、最後に「鬼についてのデマは病気が流行ることの前兆だったでは」、という言葉に対しては、何の意見も述べていない。また、68 段では、大根戦士というあり得ないだろうことに対して、大根を信じていたせいだと感心して否定の意見を述べていない。

これらの違いは、73 段「世に語り伝ふること」に述べられているように、神仏の現象などは信者に嘘だと言っても通じないのだから、信じ込まず、また疑いすぎずという兼好自身の考えに加えて、赤舌日のように何も特別な事が起きなかったのに対して、50 段では病気という凶事が起こったことによって、馬鹿らしいと切り捨てなかったのだと思う。

このように、状況により、また、現実の自分の経験から物事を判断するという兼好の考え方は、宗教に染まらず科学的現実的に物事を見ようとする現代の日本人と似通ったところがあるように思う。と同時に、現代の日本社会では神仏の現象などの信仰に関する事柄を否定的に見がちであることからすると、兼好の思考の方がより柔軟であるようにも思われる。

授業中の反応では、展開③bの「怪異」を扱った部分が活発であった。古典世界の間人である兼好の、迷信を信じない近代性という逆説と、その兼好が 50 段や 68 段

で見せる素朴で単純な信仰や関心という矛盾は、生徒にとってはおもしろい問題であった。授業では、73 段末尾「かくは言へど、仏神の奇特、権者の伝記、さのみ信ぜざるべきにもあらず」だけで簡単に片付けてよいのか、なぜ兼好はそう言うのか、という問いを出しただけで、(73 段は問題演習プリントで、授業では音読のみの扱いとした) 未解決のままにしておいた。この問いについて、レポート 3、4 のように、自分なりの回答を出した生徒も多くいた。

生徒レポート5 「兼好の自由」(A組女GK)

私は『徒然草』を「思考の自由」を軸として読んだ。10 段「家居のつきづきしく」では、住居の様子がテーマであり、綾小路の件から後徳大寺に対する評価が変化する。11 段「神無月の頃」では、柑子の困いを見て兼好自身の気持ちに変化する。177 段「鎌倉の中書王」では、吉田中納言の一言でおが屑の用意に対する評価が一変する。どれも考え方が変化しているというのは納得できる。だが、なぜ兼好はこのような思考が変化する過程を書いたのかという疑問がわいてきた。他の『徒然草』の章段はたいてい、ある人の話があって、それに対する自分の見解を述べて、「世の中は無常だ」とか「達人は心構えがすばらしい」などの教訓めいたことで締めくくっている。それらの章段を読むと、兼好の揺るがない価値観や軸というものが見受けられる。それに対して、前記の 10 段、11 段、177 段などでは、そういう兼好の強い思想の軸が崩壊しているように思われる。

私は、これらの章段を書くことで兼好は「人の考え方は変化するものなのだ」ということを伝えているのだと思う。綾小路の話聞いた時、柑子の困いを見た時、吉田中納言の一言を聞いた時、兼好はきっと「はっ」となったのだろう。自分が今まで見えていた世界とは違う新しい見方に触れて、考え方が変わるというのは、いかにも人間らしくて誰もが感じたことのある感覚だと思う。これらの章段以外の話では、兼好が出来事を主観的に観察し、意見したものを私たち読者が鑑賞するというスタイルだが、これらの章段では、兼好自身が出来事の登場人物である。その章段を読んだ私たちが主観的に見て、「人の考え方は変わるものなのだ」と思うのだ。兼好の自由さは、考え方が変わるということからもうかがえるが、章段のまとめ方にも自由さが表れているように思う。揺るがない価値観を持っているように見える兼好は、実は自由で、その自由さが表れているこれらの章段は、とてもおもしろいと思う。

生徒レポート6 「兼好の無常観」(E組女HS)

私は、『徒然草』の軸は、兼好の無常観にあると思

ます。授業で章段を読み進めてゆくにあたって、私はいつも「兼好は自由な考え方をするな」と思っていました。例えば 10 段「家居のつきつきしく」では、前半と後半で主張が変わっています。私は、この主張の転換を「矛盾しているじゃないか」と批判する気になれませんでした。なぜなら、人の思いというものは、それこそ無常で、きっかけ一つで真反対になることもあると思うからです。私も、家族や友達、先生と話すことで、自分の考えが変わることがよくあります。序段において兼好は、「あやしくこそものぐるほしけれ。」と述べていますが、それは書いているうちに自分の認識が変わったり、考えを改めたりしている間に、「自分」というものがよく分からなくなってくる状態を指しているのではないかと思います。自らの気持ちの移り変わりの無常の一部と捉えて、序段に組み込まれているように私は感じます。

137 段「花は盛りに」では、私は、兼好は変わった人だと思いました。花は満開が美しいし、祭は日中のにぎやかな時が一番だと思います。しかし兼好は初めと終わりのすばらしさばかりを説いています。この段には、兼好の無常観がつまっていると、私は思いました。確かに花が蕾み、咲き、散る様子や、祭が始まり、終わっていく様子は無常の縮小図のようだなと思います。先程の「ものぐるほしけれ」ではありませんが、私の「花」や「祭」に対する認識が少し変わりました。

兼好は、自分の主張を貫き通したり、途中で変えたりもしながら、この『徒然草』を書いています。そんな兼好の心の中には、移り変わってゆくこの世を儂いと感じる「無常観」だけではなく、自分自身の存在としての「無常」の意識があるのではないかと、私は思います。だからこそ兼好は物事の根本的な部分を見据えることができるのだと感じます。

生徒レポート 7 「思考の柔軟さ」(A組男 NA)

自分が『徒然草』を学習してきた中で、読み進めてゆく上で一番注目してきたことは、兼好の、また登場する人物の思考の柔軟さや視野の広さだ。177 段「鎌倉中書王」のように『徒然草』ではある事件やその対処について、一事はプラスと評価されたものが次の瞬間にはマイナスにひっくり返ることが多くあった。読者としての自分は、一旦は納得していたことを覆されてしまい、それでまた納得させられた。最初の意見に賛成納得していた自分が恥ずかしくなった。

175 段「世には心得ぬこと多きなり」では、酒を悪いという仏の教えに対して、途中で「待った」をかけている。その人らしさを保つのがよいという意見に対して、ちょっと意外な一面を見ることがおもしろいとも言うのだ。兼好は、世間一般の考え方に収まらない思考ができ、

人を納得させることができる理由を考えつく、流されない人間であると思った。46 段「強盗法印」の話のような、見方を変える(向きを変える)ことが大好きなのだ。

また、219 段「四条黄門命ぜられて言はく」のように、深い思考を持つ段も多くある。この段は、達人専門家の話にも近いと思うが、兼好の思考の柔軟さとしても読めると思う。この段のように、『徒然草』では思考がよく覆される。それは、兼好は(あるいは登場する人物が)とても深いところまで思考することができており、一歩離れて落ち着いて物事を見て、あるべき姿を考えることができているのだと思う。

しかし、良いことと悪いことは表裏一体という段もあったり、217 段「ある大福長者の言はく」のように、考えすぎてプラスもマイナスと同じように思えてくることもあり、悟りは迷いに等しいので、またおもしろい。

「無常」ということの意味を、人の生き死にや物事の盛衰に関わっての人生観という倫理や思想のレベルから、『徒然草』の各章段の関連や構成というテキスト観のレベルにまで応用して考えを展開した、レポート 5、6、7 のような例も見られた。高等学校の国語(古典)の授業で、中世仏教思想の無常観についてどこまで深めて読むことができるのかは難問であると思うが、「無常」という抹香臭い言葉への解釈を、質的に転換させて用いることができたのは、収穫であった。

生徒レポート 8 「兼好の逆説論法」(D組女 KC)

『徒然草』の 137 段「花は盛りに」冒頭の一文は、人々の常識的な考えや慣習を裏切るような論調で始まる。本居宣長は『玉勝間』でこれを、偽りの心だと批判したが、少なくとも文章構成の上では、こうした逆説論法は大きな効果を持つ。同様の論法は『徒然草』の随所に見られたので、それぞれについて考えてみた。

82 段「薄物の表紙は」では、きちんと揃っているのが美しいという常識を否定する。この意見は厳密には兼好ではなく他人が発言したもので、兼好はそれを高く評価する。同様の 109 段「高名の木登り」や、昇進出世はよくないという 83 段「竹林院の入道左大臣殿」も逆説的だ。兼好自身の考えという形で書かれる逆説は、150 段「能をつかむとする人」や 6 段「わが身のやむごとなからむにも」などが印象的だ。

これらの段は常識とは違うように思われるが、実は兼好以外でも世間で「よき人」と言われている人の考えていることであったり、文化に表れていたりする。文化というのは、例えば 137 段の具体例では歌の趣の話。また、82 段について、「不揃いな組み合わせが好きだ」とする文章に、私は納得した憶えがある。このように、兼好が

論ずる逆説は、本当は多くの人が心の奥では感じていることなのではないかと思う。だから私たちは『徒然草』を読めば、意外に感じる一方で、なるほど一理あると腑に落ちるのだ。少なくとも私は、兼好の考えは「心をつくり飾れるもの」(『玉勝間』)とは思わない。

日常会話でも、私たちは意外性のある話題が好きだ。その意外さがすくと腑に落ちたり、当て嵌まる事物を見つけたりした時の楽しさは格別でさえある。人によって兼好の考えが虚飾や欺瞞に見えるのは、兼好自身がその楽しみを求めて、より意表をつく書き方を模索しているせいではないだろうか。本人は 19 段「折節の移り変はるこそ」で、自分の文章は「人の見るべきにもあらず」と書いているが、こうした書き方は読者の存在を意識しているように見えるのは、私だけではないはずだ。

実際はどうであれ、それは『徒然草』が現代まで時を経て、なお読み継がれている理由の一つなのかもしれない。

生徒レポート9「常識と逆説」(C組男SM)

(前略)『徒然草』で兼好が最も書いてみたかったのは、いろいろな常識・考え方に対する逆説の提示という実験だと思う。仁和寺の法師などの失敗系章段では、本人は当たり前だと思っても、実はとんでもない考え方だったという逆転が書かれている。怪異についての章段では、一般的なたたりを恐れる考え方を、理論的に実証的に論破している。世俗への関心の章段では、世間の常識を奇妙に思える程にひっくり返してみせている。また、6 段「我が身のやむごとなからむにも」と 142 段「心なしと見ゆる者」での子どもに対する意見のように、章段間で大きな食い違いが生じているのは、『徒然草』が兼好の思想の実験的なものだったからだろう。兼好はいろいろな思考を試しているために、全体で〇〇論と名付けるのは難しいが、それは『徒然草』に物事についての様々な考えが入っていることの証明でもある。(後略)

レポート567での発想の飛躍をさらに発展させて、明確に文体＝方法としての逆説という気付きにまで至ったものも見られた。内容理解にとどまるだけではなく、内容と方法・思想と文体との一致に着目できたのは、古典初学者としては上々である。展開③での単元構成、教材配列が、いくらかでも生徒の思考を導くものとなったのであれば、成功である。

4. まとめ

以上紹介したレポートは学年 200 名の内のわずか 9 名分ではないが、他の生徒たちもそれぞれに『徒然草』

を主体的に読む努力を重ね、結果を得ている。

多くの生徒に共通して書かれていたのは、以下のような記述である。

○…最後に、気づきとしては、「読む軸」を自分なりに持って読むと、理解度が格段に上がるということだ。読み過ぎていた部分、読めていなかった部分が、他の章段とのつながりを意識する中で、いくつも明らかになってきた。…

○…兼好の自由な論じ方は、一見ただけでは理解できないどころか、矛盾しているのではと思わせる章段がいくつもある。しかし、このように一つの章段からだけでなく、複数の章段を相互に参照しながら読むことで、理解が深まることを改めて感じた。…

○…と、このように、各章段毎の関連を例を挙げていればきりが無いのだが、その根底には、パリのメトロ(乗ったことは無いが)のようにいくつもの線路が見えてきた。その線路は、連番でなくても、一駅と一駅を結ぶだけでなく、いくつもの駅を結んだり、一つの駅からいくつもの線路が出ているようなものだ。…

○…『徒然草』は一つ一つの話が短く、日記やツイッターを見ているように感じる。仮に『徒然草』が兼好の日記やつぶやきをまとめたものであるとしたら、いろんな章段のつながりは「人生」というテーマで統一されてはいても、その並びは兼好のその時々々の興味や関心が向いた先にあるのであり、矛盾や混乱を言うことはないようにも思う。人は誰でも、その時々々に色々なことに気づき考えるのであって、いつも同じ事ばかりを考えてはいない。忙しい現代ではなおさらそうであり、『徒然草』はその点で現代のスタイルにより合っているのかもしれない。だから、その人の状況次第で、いつ、どこに共感するのかということが、『徒然草』を理解する第一歩だと思う。…

多くのテキストを重ね読み、比べ読みをするという方法は、特に初学者の間では、時間や学力の制約で難しいと考えられているようであるが、実際は逆で、初学者のあるからこそテキストになじみ自分で考えて読む姿勢を作り出すことができる有効な方法であると思う。

『徒然草』は単元構成・教材配列や扱い方によって、さまざまな学習形態や方法が可能な教材である。次回はまた異なったテーマと方法での実践を重ねて行きたい。